

## VII. 教科研究

### 養 護

# 子どもの心が動く健康教育をめざして —医療保健格差から考える—

佐 藤 喜世恵

【抄録】 生徒が地球の一市民であるという自覚の元に持続可能な健康的な生活を送るためには、個人の実践力だけでなく、共に関わりあい、平和に暮らしていこうという視点も重要である。そこで、高校2年生の学校設定科目で、医療保健格差から考える授業実践を行った。また、ネパールでの医療保健の現状を参考に教材開発を試みた。多様な視点から健康教育を実践していく意義は大変大きいと考えている。

【キーワード】 学校設定科目「SLPⅡ－地球市民学・共生と平和の科学」 参加型学習 ネパール医療保健スタディーツアー ヘルスプロモーション

## 1. はじめに

本校では、2000年度より学校設定科目「新教科（現在SLPⅡ）」を設定しており、高校1年生で「心と身体の科学」「自然と科学」、高校2年生で「国際コミュニケーション」「共生と平和の科学」の4つの講座を展開している。既存教科にとらわれず、一講座3人の教員が担当し、様々な角度からアプローチしている。（詳しくは黎明書房発行「学びをつなぎ未来を拓く」参照）

養護教諭として、今まで高校1年生を対象に「心と身体の科学」の講座を担当してきたが、講座再編により今年度は、高校2年生の「地球市民学－共生と平和の科学」を担当することとなった。

健康日本21（21世紀における国民健康づくり運動）では、ヘルスプロモーションの考え方に基づいて、健康のための政策づくり、健康を支援する環境づくり、地域保健の活性化、治療中心から自己健康管理中心の保健サービスへの方向転換、個人の能力を高めること、すなわち、一人ひとりが健康を実現するための実践力を養うことと同時に健康に生きるための環境づくりが重視されている。

養護教諭として、この健康日本21を考慮し、生徒たちに健康に生きるための環境づくりをしていくためには、何ができるのだろうか。健康教育を考える時、直接的な生徒自身の実践力を高めるだけでなく、環境づくりの大切さや政策提言の必要性も実感することが重要ではないだろうか。また、自分らしく生き、他者と共に生き、より良い社会を築くこと、それには関わることなしにはなしえない、この関わる力こそ共に生きる力、共生と平和であると生徒自身に実感してほしいと考えた。筆者自身が今年度、ネパールへの医療保健スタディーツアーに参加し、それを活かした具体的に生徒が実感しやすい題材として、医療保健格差を取り上げ、今年度、授業実践を

行った。

## 2. 対象生徒と授業形態

### (1)対象生徒

高校2年生(119名—各40／40／39名の3クラスのうち担当人数は各26／16／15名)

### (2)実施方法

後期にて週1回1時間「SLPⅡ」の授業にてクラス単位。3人の教員でティームティーチングで実施。他の担当者は「子どもと人権」「ジェンダー」の分野を担当。（詳しくは本紀要SLPⅡの頁参照）

## 3. ネパールでの現地調査

他国から多くの援助を必要とするネパールでの医療はどのようなになっているのか、医療格差が広がる中でどのような対策がとられているのか、このような現状をネパールの医学生はどう感じているのだろうか。保健医療技術の進歩がもたらす恩恵と地球規模の格差、社会福祉に対してのネパールの人たちの捉え方、ユニセフや日本のNGOやJICAの海外協力隊員たちが行うネパールらしさを活かした医療保健とは。良い悪いというフィルターをかけないように、ネパールを知ろうと心がけた。

これら現地調査をもとに、養護教諭の専門性をいかした保健医療と社会福祉の視点と国際理解教育も踏まえた教材開発を行った。

## 4. 授業実践

- 領域Ⅰ－自分自身との関わり（主体である自分を見つめて自己を育てる、自己形成に関わる領域）
- 領域Ⅱ－自分と他者との相互の関わり（身近な人とより良い人間関係を築くことに関わる領域）
- 領域Ⅲ－自分と社会との関わり（わたし・あなた・みんな

なにとってより良い社会を探り、共に築くことに関わる領域)

これらの3つの領域を授業の中で生徒に意識化させながら、展開した。

#### (1)箱庭療法体験一領域Ⅰ

身体がづらい時、ついつい薬物治療に頼ってしまいがちな生徒たちであるが、対処療法ではなく、自己治癒力を向上させるセラピーのひとつとして、箱庭療法を紹介し、生徒一人ひとりが自分ひとりで箱庭を作り、自己の世界を見つめる機会をつくる。



##### —生徒の感想—

- ・自分の思うままに世界を作り出す喜びや楽しみを感じることができた。箱庭での癒しが治療に使われるのはとても良いと思った。
- ・自分の世界作り(箱庭)の時、他の人を見て当たり前だけど自分が考えつかないような箱庭ができていて、改めて人はそれぞれ違うんだなあと感じた。そして自分は自分なんだなということも感じた。
- ・自分の心を表現する授業にびびった。こんな考えが心の中にあるのだと初めて気付かされたような気がする。
- ・人と人の違いというものがどんなものか分かった。この差を実感するのは他人と仲良くするのに大切なことだと思った。

#### (2)健康設計をしていくうえで大切なものランキング

##### 一領域Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

まず、各自で9つの分野でダイヤモンドランキングをつくる。そして、小グループで結果を話し合い、多数決を用いなくて、ランキングをグループでまとめる。グループごとの結果を発表し、学びを深める。

##### —生徒の感想—

- ・自分達の考えは、自分や日本中心になっていて、世界に眼が向けられていないなと感じた。ランキングの順

位は国や地域によって変わるので共生の難しさを感じた。

- ・価値観の違いが良く分かった。固定観念は良いものではないことが分かった。格差がある中でも自分はどんなことが幸せなのかを見つけられれば豊かに暮らせる部分があると思った。

#### (3)生殖ビジネス一領域Ⅰ・Ⅲ

世界の生殖ビジネスの現状を紹介し、「選べる命・作る命」について、自分なら、どのような選択をするのかロールプレーをした後、話し合いをする。

##### —生徒の感想—

- ・人間が自分の遺伝子を知ることにより、自分の未来の病気を知ってしまう。癌やアルツハイマーになるだろうとは死刑宣告と同じなのではないか。同じように胎児が生まれる前にダウン症や重い遺伝病が分かることで、殺してしまう。難しくもあり悲しい問題だ。
- ・精子バンクは確かに子どもが欲しい人にはとても喜ばしい支えになると思う。しかし、自分の今の考えでは納得できない。何か条件を選んで自分の好みに仕立て上げるところがゲームみたいに感じるし、良い感情は持てない。また、着床前診断は心の準備という面では優れていると思うが、中絶はしてほしくない。
- ・子どもは欲しいが夫は要らない。そんな女性も訪れる精子バンク、お金で取引される命、ビジネスになっているこの時代をどうとらえるべきか。
- ・精子バンクは子どもに恵まれる喜びというより、どんな子どもを作るかを選べるというところに、もやもやした疑問があった。
- ・精子バンクに関して自分の意見を持つことができない。皆の意見を聞いてみたいと一番思った問題でした。ただ、どんな子どもが産まれても受け入れることが出来る社会作りが大切なのではないかと思います。
- ・親の都合で子どもは作られるのか。
- ・医療技術が進歩し、生殖ビジネスが可能になることは仕方が無い。ただ、人と人のつながりを切って、機械だけに頼るような生活は確立してほしくない。

#### (4)死の迎え方一領域Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

日本での終末期医療、尊厳死の法制化の問題、ネパールでの死の迎え方を紹介し、自分の死の迎え方、親・兄弟姉妹・祖父・子それぞれに対して尊厳死を受け入れられるかどうか、家族の死の迎え方を考える。

##### —生徒の感想—

- ・他の国との生と死の考え方の違いに驚かされることがたくさんあった。尊厳死について学び、自分の気持ち、相手の気持ちを良く考えなければならないことを知りました。
- ・ネパールでの火葬場の写真、燃やされる場所までカー

スト制が影響するなんて。

- ・ネパールでの死の迎え方。場所が違ふとこれほどまでに価値観が違ふんだということに気付いた。自分達の目線からだけではいけないと再認識した。
- ・祖父の死のあとだったので、この授業は印象的だった。実際、祖父は尊厳死だったし、親も自分もそうしたいと言ったが、自分の子や孫なら同じ決断が出来るだろうか。このような選択が出来るのも日本が豊かだからだ。
- ・自分自身の意思で死を迎えることができて、やっぱり周りは悲しむと思う。だからといって、苦しんでいる本人の意思を無にすることもできないので難しい。
- ・医療技術が発展しすぎると、何か本来あるべきもの、すべきものが失われるような気がする。もちろん、それによって命、人生を救われる人もいるだろうが。また、価値観についても深く考えた。価値観は統一しなくていい、認め合えばいい。そう思った。そしていろいろな文化を学びたくなった。

#### (5)医療保障の無いワーキングプワ―領域Ⅲ

アメリカ・日本・イギリスの現状、各国の取り組みを紹介し、格差社会について考える。

##### —生徒の感想—

- ・日本だけでなく産業大国アメリカにまでワーキングプワ―の波紋が広がっていることに驚いた。この不況で、医療が国民に行き渡らなくなってくるかもしれないと考えた。
- ・日本では国民全員が医療保険に入っていますが、私はそれが当たり前だと思っていました。しかし、アメリカで仕事が無くなってしまえば保険もなくなり気軽に病院も行けない。そんな格差があることを知り、ただ驚きました。格差を無くすことは難しいことだとも思いました。
- ・開発途上国以外にも格差があることを知りました。先



ネパールでの保健指導(チャイルドファンドJapan)に使われる絵本

進国にもある格差に何か解決策はないのか。今の状況の原因は何かを知りたいと思いました。

- ・イギリスの取り組みはとても良いと思いました。企業と協力して政府が対策を立てているところを日本でも取り入れてほしいと思いました。
- ・豊かさについて考えたこと、アメリカの格差の現状を知り痛感した。自分たちにとって豊かさとは何かを考えさせられた。

#### (6)ネパールでのNGO活動—領域Ⅲ

ネパールで日本のNGO(チャイルドファンドJapan)が国際協力している活動とユニセフを紹介し、貧困の連鎖・国際協力・子どもの人権を考える。



##### —生徒の感想—

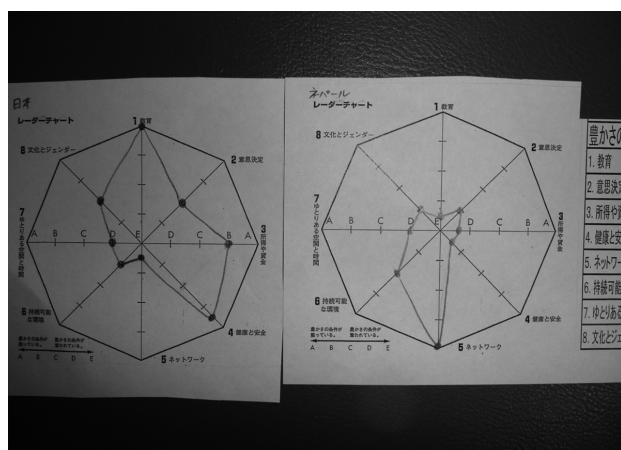
- ・様々な国の様子を知って、日本との違いに驚き興味を持った。でも、知った気になっていて実際私の知識なんて薄っぺらなものなのだろう。もっと勉強したいです。
- ・これまで日本の中だけに眼を向けていたけれども、学習を通してもっと周りを見ることが大切だと分かった。このことは各国の医療格差という規模でなくても、身の回りの人間関係にも言えると思った。
- ・日本に生まれたというだけで十分な治療が受けられる。もし、ネパールに生まれていたら…。これも格差なのか。
- ・ネパールでのNPO活動を通して、医療保健格差は教育の格差から生まれてくるのかなとも思った。
- ・ネパールでの支援活動は医療保健格差の影響を受けやすい子どもの人権問題も合わせて考えていることが分かった。
- ・ネパールの支援で、日本では子どもを一番に考えるが、ネパールでは女性や子どもは後回しにされていると知って驚いた。自分たちが正しい、こうすればいいと思っていることが通じない部分に援助していくことは容易ではないと感じた。



- ・子どもの人権を守ろうとしている国と、そうでない国の差があまりにも大きく、改善を目指しても援助さえ上手く活用できない国が多いことに驚いた。自分では当たり前だと思っていた保険制度や社会福祉が、努力の結晶なんだと感じた。
- ・ネパールで生まれても下に居続けるしかないのではなく学ぶことによって少しでも上にいける世界であって欲しい。

## (7)豊かさとは一領域Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

ネパールと日本の家族の物語から、豊かさの条件を8つ（教育・意思決定・所得や資金・健康と安全・ネットワーク・持続可能な環境・ゆとりある空間と時間・文化とジェンダー）の視点からレーダーチャートをつくり、比較し、さらに他者と話し合うことにより豊かさの根本を考える。

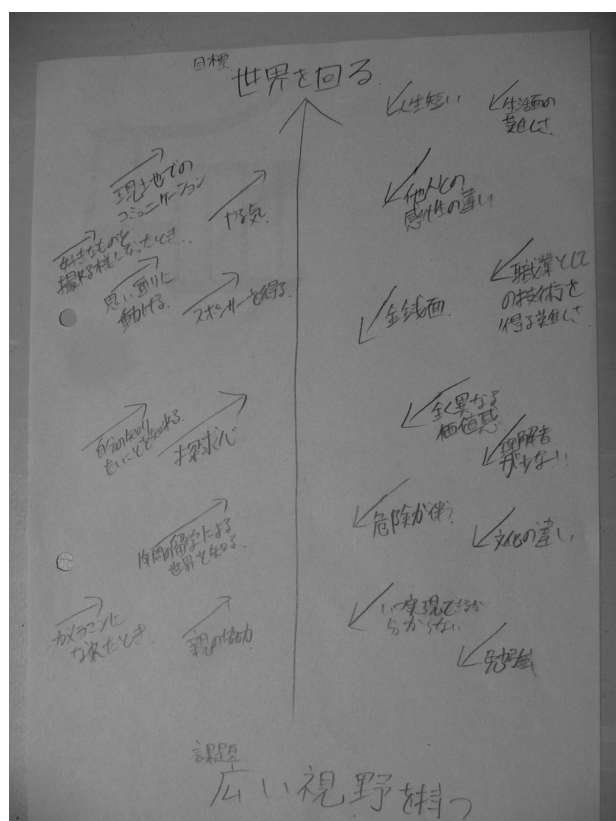


## —生徒の感想—

- ・貧しさと豊かさ自体に定義がないのに勝手に先進国は豊かと決め付けている我々はどうかと思いました。経済的には圧倒的に有利なのに。
- ・幸せについて考えさせられました。幸せってよく言うけど、人によって大きく違う。お金持ちでも幸せを感じない人、いろいろいると改めて知りました。人生において何を一番重く置くか、小さいことにも幸せを見つけようとするのが幸せになることではないかと思いました。自分の価値観を人に押し付けてはいけないなとも思いました。
- ・一家の話をどの観点から見て評価するのかによって、また人によって、レーダーチャートの形はバラバラになる。幸せ度なんて絶対答えのないものを計ることで物事の多面性が分かる。言葉にしてしまえば簡単に薄い気がするが体験してみるとすごいことなんだと分かった。
- ・貧しさや豊かさと聞いてまず浮かぶのは所得や賃金ですがそれだけではないことが分かった。ゆとりある空

間や時間で気持ちが豊かになれるし、持続可能な環境があるかどうかも重要な気がする。

- ・私にとっては貧しいこととは子どもが無条件に教育を受けられないことや社会保障で医療が受けられないことなんだろうと思う。豊かであるのは確かに経済面で豊かであるのも大切だが、地域で意思決定が出来ることやネットワークのつながりが強いことも大切な条件であることが分かった。



力の分析

達成目標	目標計画	スケジュール
1年後 行きたい国に入居。	学べることや学びたいことを知る。	2月：教科書や参考書を読む。4月：海外の文化や習慣を知る。6月：海外の言語を学ぶ。8月：海外の旅行計画を立てる。10月：海外の旅行に行く。12月：海外の旅行の振り返りをまとめる。
5年後 やりたい仕事につく。	5年外にわたって経済状況を把握し、人間関係を築く。	1年：1年生のうちに、海外の文化や習慣を知る。2年：2年生のうちに、海外の言語を学ぶ。3年：3年生のうちに、海外の旅行計画を立てる。4年：4年生のうちに、海外の旅行に行く。5年：5年生のうちに、海外の旅行の振り返りをまとめる。
15年後 自分の力でやりたいことを実現させる。	独立して生きていくための経験と実力を身につける。	10年：10年生のうちに、海外の文化や習慣を知る。11年：11年生のうちに、海外の言語を学ぶ。12年：12年生のうちに、海外の旅行計画を立てる。13年：13年生のうちに、海外の旅行に行く。14年：14年生のうちに、海外の旅行の振り返りをまとめる。15年：15年生のうちに、海外の旅行の振り返りをまとめる。

行動計画

#### (8)力の分析・行動計画—領域Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

社会に参加するために、どのような行動をとることができるか、自分に何ができるのかを具体的に考えるために行動計画表を作る。また、実際に目標に達成するためにどのような行動が有効なのか、目標達成を阻むものと有効に働く力・役立つ行動を考える。

##### —生徒の感想—

- ・自分を見つめる時間があり、とても印象に残っている。自分の目標を達成するためには何が邪魔をして、何が助けるのかを考えたり、そんな時間、自分ひとりではなかなか作れないと思った。
- ・自分たちに出来る支援を考える時、お金を出すことだけで良いのか？という疑問が生まれた。

##### —全体を通しての生徒の感想—

- ・人は人との繋がりで生きているということを改めて感じた。生活格差で貧しい人も今ある社会や人とのつながりを絶ててしまえば生きていけない。人とのつながり、つまり共生が避けられないなら、その共生のあり方を変えることで平和が実現できるのではないかと思った。この平和の尺度として医療保健格差を無くそうとか、国内総生産とかがあるのだと思う。
- ・共生と平和はつながっていると思っていたけど、その国にはその国のやり方があり、医療には受け入れられないところもあり、医療技術にも格差がある。世界を平和にしようとするのは漠然としていて、もっと具体的に考えることが必要だと分かった。
- ・考えの多様性を学び、もっと柔軟に物事を受け入れ、理解するようにしたいという思いが強くなりました。
- ・以前は社会で起きていることは自分には関係ないものだと考えていて現実を知らなかった。しかし、学習を深めていくうちに理解が深まり考えを改めることが出来た。

## 5. まとめ

昨年度は、保健の単独授業で健康教育と国際理解教育をコラボレーションする試みを実践した。今年度大きく変わったところは、3人の教員でチームティーチングをしたことである。他教科（英語・家庭科）の教師との授業は、大変有意義であった。合同授業では、それぞれが共生と平和をどの角度から考えさせたいのかが生徒にも明確になった。それぞれのグループが学びあいをするにより、より学習が深まった。

また、ネパールでの現地調査は、教師自身の視野の拡大にもつながり、教科書が無いこのような授業には、教材開発にも大変有効であった。

## 〔参考文献〕

- 1) 佐藤喜世恵：子どもの心が動く健康教育をめざして、名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要第53集，2008
- 2) JICA中部：平成19年度 開発指導者研修報告書，2008
- 3) JICA中部：平成20年度 開発指導者研修報告書，2009
- 4) JICA中部：教室から地球へ 開発教育・国際理解教育 虎の巻，2006
- 5) 名古屋大学教育学部附属中・高等学校，平成18年度指定スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書 第3年次，2009
- 6) 佐藤喜世恵：国際理解教育と健康教育のコラボ，分科会D，全国国立大学附属学校連盟養護教諭部会研究集録第43，2008年度
- 7) 黎明書房：学びをつなぎ未来を拓く，2006
- 8) 大修館書店：最新保健体育，平成21
- 9) シャプラニール：ネパールNGO自立に向けて，2002
- 10) シャプラニール：シャプラニールのネパールプロジェクト，1997
- 11) 斉藤千宏：NGO大国インド，明石書店
- 12) ユニセフ2007年パンフレット
- 13) チャイルドファンダJapan 2008年パンフレット